

ウルドゥー語, ヒンディー語の複文

萬宮 健策

1. ウルドゥー語とヒンディー語

ウルドゥー語は、現代(新期)インド・アリア諸語の1つに数えられる屈折語である。使用者人口は、南アジアを中心に約4億人を数える。一方ヒンディー語は同地域で約8億人が理解する。表記する文字は異なるものの、両言語には口語レベルでは同一言語と考えると差し支えない程度の差異しかない。どちらの言語も多言語社会である南アジアにおける接続言語としての役割を果たしており、母語話者でなくとも日常生活で用いる人が非常に多い。そのため、地域偏差や話者の社会階層偏差が大きい点が特徴である。

本稿では、ウルドゥー語の連用修飾的複文を扱う。本稿でウルドゥー語と呼ぶ場合、特に断らない限り、文構造という観点からヒンディー語も含むこととするが、ヒンディー語とウルドゥー語の差異については本稿では詳細には触れないこととする。今回の例文で示すウルドゥー語とヒンディー語では、語彙レベルでの差異が見られる場合はあるが、文構造という観点からは差異はないと考えたためである。

たとえば、例文(1)で新聞という語彙は *axbār* という語彙を用いているが、ヒンディー語では *ak^hbār* と発音される。また、(4)の例文では、父親という語彙に *wālid sāhab* が用いられているが、ヒンディー語では通常 *pitā jī* という語彙に代わる。しかし文構造は同一である。

2. 先行研究

ウルドゥー語の文構造は、さまざまな面から研究がなされてきた。ペルシア語やアラビア語からの借用が多く多義語が多いウルドゥー語では、特に文体論の観点からの研究が進んでいると指摘できる。

3. ウルドゥー語の文構造

ウルドゥー語では、文は原則として SOV 構造をとる。しかし、複文では接続詞 *ke* (英語の *that* に相当) を用いて従属節をつくる。

ウルドゥー語では、文主語が主格、与格、能格を取り得る。与格構文となるのは、喜怒哀楽や義務・強制を示す場合、能格構文となるのは、他動詞完了分詞を用いる単純過去や完了形の場合である。以下の例文のいくつかが該当するとおり、複文において主語が取る格が異なる場合、原則として省略が許されず、主語は明記する。また、同一の格の場合でも、ことなる人やモノが主語となる場合も、それぞれを明記する。

日本語のような連用修飾の多用は見られないが、一部の文では、日本語からのほぼ直訳

が可能な形式を取ることができる (例文(1)など.)。

3.1. 例文の分析

では、今回の例文を個別に分析する。必要に応じてコメントを付した。

- (1) 彼はいつも新聞を読みながらご飯を食べる。

vo hamešā axbār par^hte hue
 彼 NOM. いつも ADV. 新聞 NOM.M.SG. 読む PRS.PTCP.OBL.

hī k^hānā k^hātā hai
 強調 食事 NOM.M.SG. 食べる PRS.M.SG.

動作の同時進行を示す場合、その動作が2つであれば、動詞の未完了分詞斜格形が用いられる。

- (2) (私は) 昨日は 10 時に家に帰って、少しテレビを見て (から)、寝ました。

kal main das baje g^har wāpas āyā aur t^hoī der tak
 昨日 私 NOM. 10 時 家 OBL.M.SG. 帰る PST.M.SG. そして 少し ADV.
 TV dek^h kar so gayā
 テレビ NOM.M.SG. 見る STEM. する STEM. 寝る PST.M.SG.

動作が連続して行われる場合、2つなら「動詞語幹+kar (～して)」で示すが、上記の例のように3つの動作が次々に行われる場合は、文の構造上「○○して、××して、△△した」という文も作れるが、例文のとおり、いったん文を切り接続詞でつなぐ方が自然である。

- (3) (私は) 昨日階段で転んで、ケガをしてしまった。

kal (main) sī^hiyon se gir kar
 昨日 (私 NOM.) 階段 OBL.F.PL. から INS. 落ちる STEM. する STEM.
 zaxmī ho gayā
 けが人 NOM.M.SG. なる PST.M.SG.

この文のように、転んだ結果ケガをしたという場合でも「動詞語幹+kar (～して)」の表現が用いられる。なお、ウルドゥー語では、主語は省略されることはあまりない。

- (4) 今日父は会社に行き、兄は大学に行った。

āj b^hī wālid sāhab daftar gae aur
 今日 も 父 NOM.M.SG. 会社 OBL.M.SG. 行く PST.M.PL. そして
 bare b^hāī university gae
 兄 NOM.M.PL. 大学 OBL.F.SG. 行く PST.M.PL.

文の主語が異なる場合, 接続詞で文がつけられる。「動詞語幹+kar (～して)」形は用いられない。なお, 父親という語彙が2語からなり, 動詞語尾も複数形になっているのは, 身内であっても目上の人に対しては敬称や複数形を用いて尊敬の念を表すためである。兄も同様の扱いである。

- (5) (あの人は) 今日帽子をかぶって歩いていた。

āj (vo) ṭopī pahne hue
 今日 彼 NOM.M.SG 帽子 OBL.F.SG 着る PST.PTCP.OBL
 caltā thā
 歩く HABIT.PST.M.SG

「帽子をかぶって」という付帯状況は, 完了分詞斜格形を用いて表現される。方言によっては, 目的語の性・数に一致して完了分詞の語尾が変化することがある。

- (6) (私は) 休みの日はいつも本を読んだり, テレビを見たりしています。

main c^huṭṭiyon men kitāben paṛ^htā hūn,
 私 NOM. 休日 OBL.F.PL. に INS. 本 NOM.F.PL. 読む PST.M.1.sg.
 yā TV dek^htā hūn
 接続詞 テレビ NOM.M.SG 見る PST.M.1.sg.
 並行する動作は, 接続詞を用いて文を並列して表現する。

- (7) 時間がないから, 急いで行こう。

waqt kam hai, is liye jaldī
 時間 NOM.M.SG 少ない ADJ. COP.PRS.SG だから 早く ADV.
 calnā cāhiye
 歩く INF. PTCP.SG

動詞不定詞+不変化詞 cāhiye は, 義務や強制を表す。上記(7)では, 「行くべきだ」という意志が明示されている。相手に同意を求める場合は, calen という接続法の形が用いられる。

- (8) 昨日は頭が痛かったので, いつもより早く寝ました。

kal sar men dard t^hā, is liye
 昨日 頭 OBL.M.SG LOC. 痛み NOM.M.SG COP.PST.M.SG だから
 main jaldī so gayā
 私 NOM. 早く ADV. 寝る PST.M.SG

(8)の構文では, 前半と後半とで, 文法上の主語が異なるため, 後半部分でも主語を表

示すべきである。すなわち前半部分は、「(私の) 頭の中に痛みがあった」という表現を用いるので、文法上の主語が異なる。

- (9) あの人は本を買いに行った。

vo	kitābeṅ	xarīdne	gayā
彼 NOM.	本 NOM.F.PL.	買う INFOBL	行く PST.M.SG

「～しに行く」は、--ne jānā という表現が用いられる。--ne の部分は、動詞不定詞の斜格形である。

- (10) (彼は) 外が良く見えるように窓を開けた。

us	ne	k ^h īrkī	k ^h olī	tāke
彼 OBL.SG	ERG	窓 NOM.F.SG	開ける PST.F.SG	接続詞
bāhar	kā	manzar	acc ^h ī tarah	dek ^h
外 OBL.M.SG	の GEN.	景色 NOM.M.SG	良く ADV.	見る STEM.
sake				
可能 SBJV.SG				

「～ように」という表現は、接続詞 tāke --- 動詞語幹+可能の助動詞接続法で表す。

- (11) ここでは夏になると、良く雨が降ります。

yahān	garmiyon	kā	mausam	āe gā,	to
ここ	夏 OBL.F.PL.	の GEN.	季節 NOM.M.SG	来る FUT.M.SG	接続詞
bār bār	bāriš	ho gī			
何度も ADV.	雨 NOM.F.SG	なる FUT.F.SG			

従属節が単純未来形を用いているので、主節も時制の一致をさせる。

- (12) 窓を開けると、冷たい風が入ってきた。

jab	(maiṅ ne)	k ^h īrkī	k ^h olī,	to
時 ADV.	私 OBL. ERG	窓 NOM.F.SG	開ける PST.F.SG	接続詞
t ^h andī	hawā	āī		
冷たい ADJ.F.	風 NOM.F.SG	来る PST.F.SG		

(11)と同様に、ウルドゥー語では、主節と従属節の時制は原則として一致する。

- (13) 坂を上ると、海が見えた。

jab	(maiṅ)	sīr ^h ī	par	car ^h ā,	to
時 ADV.	私 NOM.	階段 OBL.F.SG	LOC.	登る PST.M.SG	接続詞

samandar nazar āyā
 海 NOM.M.SG 見える PST.M.SG
 文の構造は, (12)と同様である.

(14) 明日雨が降ったら, 私はそこに行かない.

agar kal bāriš ho gī to main wahān
 もし 明日 雨 NOM.F.SG なる FUT.F.SG 接続詞 私 NOM. そこ
 nahī jāūn gā
 否定辞 行く FUT.M.SG

(15) もっと早く起きればよかったなあ.

kāš main aur jaldī uḥtā
 間投詞 私 NOM. もっと ADV. 早く ADV. 起きる OPT.M.SG
 コピュラ動詞をともなわない未完了分詞は, 反実仮想を表す. 文頭に間投詞 kāš を置くことで, その意味がより明確となる.

(16) あんなところに行かなければよかった.

muj^he aīsī jagah nahīn jānā
 私 DAT. そのような ADJ.F. 場所 NOM.F.SG 否定辞 行く INF.
 cāhiye t^hā
 PST.PTCP.M.SG
 動詞不定詞+cāhiye t^hā (不変化) が, 前件否定の反実仮想に用いられる.

(17) 1に1を足せば, 2になる.

ek meṇ ek milāne se do bantā hai
 1 中 LOC. 1 合わせる INF.OBL. INS. 2 なる PRS.M.SG
 算数における $1 + 1 = 2$ という表現とは異なり, 日本語例文を忠実に訳した文である.

(18) 駅に着いたら電話をしてください.

jab āp ištešan pahuñen to
 時 ADV. あなた NOM. 駅 NOM.M.SG 着く SBJV.PL. 接続詞
 muj^he fon kar lijiye
 私 DAT. 電話 NOM.M.SG する IMP.PL.

(18)で, 従属節は, 「いつ着くかはわからないが, 着いたら」というニュアンスを含む.

(19) 日曜日になったら、みんなで公園に行きたいなあ。

itwār	ko	ham	ikatt ^h e	pār
日曜 OBL.M.	DAT.	私たち NOM.	一緒に ADV.	公園 NOM.M.SG.
jānā	cāhte	haiṅ		
行く INF.	欲する	PRS.M.PL.		

(20) 明日雨が降ったら困るなあ。

agar	kal	bāriṣ	huī	to	afsos
もし 明日	雨 NOM.F.SG.	なる PST.F.SG.	接続詞	残念 NOM.M.SG.	
ho	gā				
である COP.PRS.SG.					

(21) 家に来るなら、電話をしてから来てください。

agar	āp	ko	mere	g ^h ar	ānā
もし あなた OBL.	DAT.	私の GEN.OBL.	家 OBL.M.SG.	来る INF.	
ho,	to	fon	kar	ke	
COP.SBJV.SG.	接続詞	電話 NOM.M.SG.	する STEM.	する STEM.	
āiye					
来る IMP.PL.					

主節で形の異なる「する」の語幹がならんでいるが、最初の動詞が「する」である場合に限り、2つめの「～して」を表す kar が ke に変化することが多い。kar kar と2回繰り返す表現も可能である。例文(2)のを参照されたい。

(22) [もうすぐベルが鳴るので] 鳴ったら、教えてください。

(t ^h oṛī	der	meṅ	g ^h aṅṭī	baje	gī,	is	liye)	jab
(少し ADV.	ベル NOM.F.SG.	鳴る FUT.F.SG.	鳴る FUT.F.SG.	だから)	時 ADV.			
g ^h aṅṭī	baje	to	muḷ ^h e	batāiye				
ベル NOM.F.SG.	鳴る FUT.SG.	接続詞	私 DAT.	言う IMP.PL.				

(23) [もしかしたらベルが鳴るかもしれないので] もし鳴ったら、教えてください。

(ho	saktā	hai	ke	g ^h aṅṭī	baje,	is	liye)
(かも知れない PRS.SG.	接続詞	ベル NOM.F.SG.	鳴る FUT.SG.	鳴る FUT.SG.	だから)		
agar	g ^h aṅṭī	baje	to	muḷ ^h e	batāiye		
もし ベル NOM.F.SG.	鳴る	接続詞	私 DAT.	言う IMP.PL.			

- (22)ベルが必ず鳴る場合は時を表す関係副詞を用い, 従属節は単純未来形となるが,
 (23)ベルが鳴るかどうかがわからない場合, 従属節は不確定未来形となる.

- (24)働かざる者食うべからず／働かない者は, 食べるべきではない.

jo	kām	nahīṅ	kartā,	us	
関代 NOM.	仕事 NOM.M.SG	否定辞	する PRS.M.SG	彼 DAT.SG	
ko	k ^h ānā	b ^h ī	nahīṅ	k ^h ānā	cāhiye
DAT.	食事 NOM.M.SG	も	否定辞	食べる INF.	PTCP

- (25)もう少しお金があったらなあ.

agar (mere	pās)	aur kuc ^h	paise
もし (私 OBL.	近くに ADV.)	より多く ADJ.	お金 NOM.M.PL.
hote			
ある PRS.M.PL.			

反実仮想表現なので, (15)と同様に, コピュラ動詞をともなわない未完了分詞を用いる.

- (26)これも食べたら?

ye	b ^h ī	k ^h āen
これ NOM.	も	食べる SBJV.PL.
言いさし, 提案は不確定未来形を用いる.		

- (27)やりたいなら (自分の) 好きなようにやれば?

agar (āp	ye kām)	karnā		
もし (あなた NOM.PL.	この仕事 NOM.M.SG)	する INF.		
cāhen,	to	(apnī)	marzī	se
したい SBJV.PL	接続詞	(自分 GEN.F.)	意志 OBL.SG	INS.
karen				
する SBJV.PL				

- (28)このコップは落としても割れない.

ye	gilās	girāne	se	b ^h ī	nahīṅ
この	グラス NOM.M.SG	落とす INF.OBL.	INS.	も	否定辞
tūte gā					
壊れる FUT.M.SG					

この文は文法的に非文ではないが、「落としても」の部分は、「落ちても(girme)」という自動詞を使う方が自然であると、インフォーマントが指摘している。

(29) このリンゴは高かったのに、ちっとも甘くない。

ye	seb	mahingā	t ^h ā,	lekin	bilkul
この	リンゴ	NOM.M.SG	高い	ADJ.M.SG	COPPST.M.SG
				しかし	全く
				ADV.	
mī ^h ā	nahīn				
甘い	ADJ.M.SG	否定辞			

ちっとも甘くない、という強調は、否定辞を文末に持って来ることによって表現される。通常は、形容詞や動詞の直前に置く。

(30) 彼の家に行ってみたけれども、彼はいなかった。

maiṅ	us	ke	g ^h ar		
私	NOM.	彼	OBL.SG	の	GEN.OBL.
				家	OBL.M.SG
gayā,	lekin	vo	g ^h ar	par	nahīn
行く	PST.M.SG	しかし	彼	NOM.SG	家
				OBL.M.SG	に
					LOC.
					否定辞
t ^h ā					
いる	PST.M.SG				

家に行ったという表現では、「に」に相当する後置詞が省略されていると考え、家という語彙が斜格形になっている。

(31) あの人が来るまで、私はここで待っています。

jab	tak	vo	na	āe,	tab
時	ADV.	まで	彼	NOM.SG	否定辞
				来る	PERF.M.SG
					その時
tak	maiṅ	us	kā	intizār	
まで	私	NOM.	彼	OBL.SG	GEN.
				待つこと	NOM.M.SG
kartā	hūn				
する	PRS.M.SG				

(32) あの人が来るまでに、食事を作っておきますよ。

us	ke	āne	tak	maiṅ	k ^h ānā
彼	OBL.SG	GEN.OBL.	来る	INF.OBL.	まで
				私	NOM.
					食事
					NOM.M.SG
tayyār		kar	dūn	gā	
準備された	ADJ.	する	FUT.1.M.SG		

4. 略号一覧

本稿で用いた略号は以下のとおり.

ABL	奪格 (後置詞)	M	男性名詞
ADJ	形容詞	NOM	主格
ADV	副詞	OBL	後置格
COP	コピュラ動詞	OPT	希求法
DAT	与格 (後置詞)	PST	過去
ERG	能格 (後置詞)	PERF	完了
F	女性名詞	PL	複数
FUT	未来形	PRS	未完了
GEN	属格 (後置詞)	PTCP	分詞
HABIT	習慣	SBJV	接続法
INF	不定詞	SG	単数
INS	具格 (後置詞)	STEM	語幹
LOC	位置格 (後置詞)		

謝辞

本稿執筆に当たり, 例文チェックおよび貴重なコメントをいただいた, スハイル・アッバース・ハーン先生 (本学客員教授, 1966年パキスタンのファイサラーバード生まれ. 母語はパンジャービー語だが, 第一言語はウルドゥー語) に心から御礼申し上げます. 本稿で事実誤認等があるとすれば, すべて本稿執筆者に責任があります.

参考文献

- Agnihotri, Rama Kant. 2007. Hindi: An essential grammar. London: Routledge
McGregor, R.S. 1999. Outline of Hindi Grammar. New Delhi: Oxford University Press.
Schmidt, Ruth Laila. 1999. Urdu: An essential grammar. London: Routledge.